

# 和辻哲郎『風土』における「間柄」の考察

吉村仁里

## 序章

和辻哲郎（一八八九～一九六〇）は近代日本が輩出した代表的な哲学者である。その思想の根底に「人間としての」生き方を問う、いわば「間柄」の思想が流れていることはよく知られているが、ここではその著『風土』を主に取り上げ、その中から和辻の「間柄」の思想について深く考察してゆきたい。

『風土』は一九三五（昭和一〇）年、和辻四十六歳の作品である。和辻は一九二七（昭和二）年二月文部省在外研究員としてヨーロッパへ向けて出発した。この船上での経験が、『風土』執筆のきっかけとなったのは確かである。しかし、『風土』の構想には、実はもう一つのきっかけがあった。和辻は序言において、次のように述べている。

「自分が風土性の問題を考えはじめたのは、一九二七年の初夏、ベルリンにおいてハイデッカーの『有と時

間』を読んだ時である。人の存在の構造を時間性として把捉する試みは、自分にとって非常に興味深いものであった。しかし時間性がかく主體的構造として活かされたときに、なぜ同時に空間性が同じく根元的な存在構造として、活かされてこないのか、それが自分には問題であった。」（Ⅷ・一ページ）

詳しい議論は本論に譲るとして、和辻がハイデッカーの思想に触れたことが『風土』を著すきっかけになったことは間違いない。

ところで、『風土』には、正確には『風土―人間学的考察―』というタイトルがつけられている。その副題の示すとおり、この中で和辻は「人間」という部分に最もこだわっている。「人間」をひとりの人としてだけでなく「人」の「間」、つまり「間柄」における人として捉え、重きを置いているのだ。

和辻が『風土』で捉えた「間柄」とはどのようなものか。

また、「風土」と「間柄」とはいかなる関係性を持ち、和辻はそれをどのようにとらえているのだろうか。ここでは、和辻の研究の跡を追いながら考察してゆきたい。

## 第一章 風 土

### 第一節 「風土」とは

さて、『風土』を中心に考察することにしたが、そもそも風土とは何か。一般的に風土は、「土地の状態、すなわち気候・地味など」（広辞苑第三版）と理解されている。我々人間を取り巻く自然環境がすなわち風土とされている。しかし、和辻哲郎が『風土』において考察の中心とした風土は、単なる自然環境ではない。周りを取り巻く自然環境において、自分自身を見いだす、その仕方こそが風土であると和辻は述べている。自分自身を見いだすというのは、何も寒さや暑さを感じる主観としての「我」を理解するということではない。風土における自己了解とは、例えば寒さから身を護ったり、花の美しさを楽しんだりする個人的社会的な手段の発見としてあらわれるのである。しかも、その手段は、単に現在の我々の間においてのみあるものでなく、祖先以来の長い間の堆積、つまり歴史的なものであるということが出来る。

この自己了解の表現の例がいくつか挙げられている。そ

のなかで家屋の様式はもっともわかりやすい例の一つであろう。（建物としての）家は寒さを防ぐものと考えられる。また逆を考えると、暑さを防ぐものでもある。同様に、暴風、大雨などによる洪水、地震、乾燥による火事など、様々な制約があり、それらの軽重を鑑みた上での様式が、年月を経て作り上げられる。つまり、家を作る仕方の固定は、人間の自己了解の表現であると和辻は述べているのである。

### 第二節 「風土性」、「歴史性」の関係

前節でも少しふれたように、風土における人間の自己了解の仕方は、同時に歴史的でもある。そもそも、人間存在は空間性と時間性とを根本構造として持っており、そのふたつは互いに相即不離の関係にある。もし、人間存在の構造をただ時間性からのみ把握しようとするなら、それはただ個人意識の底にのみ人間存在を見いだそうとしているにすぎず、一面的である。空間性の側からのみの視点も同じように一面的であるといわざるを得ない。人間存在の空間的・時間的構造は、社会的存在としての人間においては風土的・歴史的なものとして認識される。そして、空間性と時間性との関係と同様に、風土と歴史も切り離して考えることはできない。風土とは「歴史的風土」であり、歴史は「風土的歴史」なのである。すなわち、相即不離であると

いえる。

従って、人間存在について考察する際には、歴史的な面と風土的な面を切り離すことなく、考えるべきであろう。

しかし、『風土』以前、歴史の側からの考察に力が入れられて、風土的側面については、あまり注意が払われていなかったと和辻は考えた。もっともこの考えには彼のハイデッカー批判の色が濃く出ているようである。人間存在の構造を時間性として把握したハイデッカーの『有と時間』に興味を抱いた和辻は、その中で時間性に相即するはずの空間性の影の薄さを感じ、その原因を人間の個人的・社会的二重構造のうち個人的な面しか捉えていないこととし、そこにハイデッカーの限界を見たという。そこで、「人間の歴史的・風土的特殊構造を特に風土の側から把握しよう」と（Ⅷ・二三ページ）和辻は試み、『風土』を著したのである。

### 第三節 「風土」の型

風土は人間の自己了解の仕方であると、前の節で述べた。しかしそれは、まだ一般的議論であり、具体的に人間存在の特殊な風土的規定を理解するには至っていない。そこで、和辻は、「具体的な人間の存在の仕方を、すなわちその特殊性における存在を、把握するために、存在的な認識、す

なわち歴史的・風土的な現象の直接的な理解に向かわなくてはならぬ。」（Ⅷ・二二ページ）と決意した。

人間存在の風土的特殊構造を具体的に把握するために必要なものは直観であると感じた和辻は、「特殊なる風土現象の直観から出発して人間の特殊性に入り込」（Ⅷ・二三ページ）むため歴史的・風土的現象について類型的な解釈を試みている。

和辻が見いだした風土の型とは、「モンスーン」「砂漠」「牧場」の三つである。熱帯の大洋から陸に吹く夏の季節風、モンスーンを受ける地域、それがモンスーン域である。東アジアの沿岸一帯、つまり中国も日本も、風土的にモンスーン域に属する。暑熱と極度の湿気との結合を特性とするこの風土における人間の構造は、受容的・忍従的であり、それは「湿润」という言葉で表わされる。尤も同じモンスーン域内ではあっても、日本と中国、あるいは日本と南洋ではそれぞれ独自の風土があり、一概にモンスーン受容性・忍従性を持つとは言えない。従って、ここはあくまでモンスーン域としての特徴付けを行うことにして、特に日本の風土については、次の章で詳しく考察したいと思う。

つぎに、アラビア、アフリカなどの沙漠的風土の特徴として「乾燥」とそれに基づく「生気のなさ」を挙げ、これに応じる人間の構造を「対抗的・戦闘的」と規定している。

これはすなわち、死の恐怖をもって迫る自然に対して、また自分の属する集団以外の人間の集団に対しての「対抗的・戦闘的」関係、その裏返しとして同集団内の絶対的服従の関係である。和辻は、人と世界との「対抗的・戦闘的關係」を、「人間の全体性への個人の絶対的服従の關係」(Ⅷ・六〇ページ)とも表現している。

類型の三つめは、牧場の風土である。和辻は、「牧場」という言葉でヨーロッパの風土を特徴づけ、考察している。ヨーロッパの牧場的風土は、夏の乾燥と冬の湿潤とがもたらす、他の類型のいずれとも全く異なる「湿潤と乾燥との総合」として規定される。その特徴から、雑草や害虫との戦いを必要としない牧場地域においては、自然が人間に対して従順であると述べている。

## 第二章 間 柄

### 第一節 人間の二重性格

『風土』においては、「個人的・社会的なる二重性格を持つ人間」といった表現が多用されている。ここではそれについて詳しく考察したい。

和辻は、その著『倫理学』において、「人間の学」を「人と社会とを人間の二重性格として把握し、そこに人間の最も深い本質を見いだすということ」(Ⅹ・一六ページ)

とし、次のように述べている。

「日常の用法においては人間は *man* や *Mensch* の同義語であり、また人間学はアントロポロジーの訳語ではないか。確かにそうである。人間という言葉はそのような意味をも背負っている。しかしそれだけではない。人間という字面そのものが示しているように、それはまた人の間、すなわち『よのなか』『世間』を意味する言葉でもあった。しかもそれがこの語の本来の意味なのである。(中略)日本人はその永い歴史生活の間にこの語を個体的な人の意味に転用したのである。(中略)それらにおいては人間はいつも『よのなか』を意味している。しかも『よのなか』について言われることはすべてその中に住むところの人に通用する。かかる体験が言葉の転用として表現せられたのである。」(Ⅹ・一六―一七ページ)

また、

「我々はかくも意義深い『人間』という言葉を所有する。この語義の上に我々は人間の概念を作ったのである。人間とは『世の中』であるとともにその世の中における『人』である。だからそれは単なる『人』ではないとともにまた単なる『社会』でもない。ここに人間の二重性格の弁証法的統一が見られる。(中略)こ

の弁証法的な構造を見ずしては人間の本質は理解せられない。」(X・一七〜一八ページ)

との記述もある。

和辻は、この個人かつ社会であるという人間の二重性格を「間柄」という言葉を用いて表現している。『風土』においては、「個人にして社会であること」を「すなわち『間柄』における人であること」(VIII・一三八ページ)と規定し、他者との「間柄」の中に生きるいわば「間柄的存在」として、人間を捉えているのである。

## 第二節 「風土」・「間柄」の関係

それでは、その「間柄」と「風土」とは、互いにどのような関わりを持っているのだろうか。『風土』に次のような一節がある。

「人間の第一の規定は個人にして社会であること、すなわち『間柄』における人であることである。従ってその特殊な存在の仕方はまずこの間柄、従って共同体の作り方に現われてくる。」(VIII・一三八ページ)

先にも述べたように、人間の存在の仕方に特殊性をもたらすものは風土である。この一節を見ると、考え方によっては、風土は「間柄」に現れる人間の存在の特殊性の一要因であると解釈することができる。しかしそうすると、「間

柄」がもとも存在し、それが「風土」によってその土地に応じた特殊性をもたらされる、というように、「風土」と「間柄」とをバラバラに捉えてしまうことになってしまう。果たして、そのような捉え方で、和辻が「間柄」に固執し、重きを置いて主張した理由が説明できるだろうか。

『風土』の序言は、次のような書き出しで始まる。

「この書の目ざすところは人間存在の構造契機としての風土性を明らかにすることである。」(VIII・一ページ)の風土性を明らかにすると、ここで「人間存在」は、「風土」の論調から考えると、ここで「人間存在」は、「間柄」としての人間「あるいは単に「間柄」と置き換えることができると思われる。「間柄の構造契機としての風土性」つまり、「間柄」を形成する契機となっているのが風土性であり、それを明らかにするのが『風土』の目的だとしているのである。そうだとすると、「風土」は「間柄」の構造そのものに関わっていると考えることができる。また、「風土」を人間の自己了解の仕方と規定した箇所では

「すなわち我々は『風土』において我々自身を、間柄としての我々自身を、見いだすのである。」(VIII・一一ページ)

と述べており、ここでは「風土」は「間柄」における人間

の自己発見の契機であるという解釈ができる。

総じて考えると、和辻は「風土」と「間柄」との関係について、「風土」が単に「間柄」の特殊性の一要因であるのではなく、それ以上の何らかの関係をもっていると考えてはいるようである。しかしながら、彼自身、その何らかの関係性というものはつきりとはつかんでいないのではないだろうか。それ故、どことなくとらえどころのない議論という印象を与えてしまっているようである。後に、彼はその直観による論理の展開という点で、数多くの批判を受けるが、ここでも、その鋭い直観がはたらいしたもの、それを確認づける事実なり論理なりがつかないかかったと考えることもできるのではないだろうか。

また、「風土」と「間柄」との間には、両者とも西洋近代哲学の人間観に対するテシチテーゼであるという共通点を見いだすことができる。西洋近代の人間観とは端的に言う、個人主義的人間観であるが、和辻はそれについて、次のように述べている。

「ヨーロッパの近代資本主義は人間を個人として見ようとする。家族もまた経済的利害による個人の結合として理解せられる。(中略)すなわち精神と肉体、人生と自然、及び大きい人間の共同態の対立が主として注意せられる」(Ⅷ・一四四ページ)

すなわち、「精神と肉体」、あるいは「人生と自然」が切り離され、対立している状態に対するものとして「風土」が、また、独立した存在である「個人」へのアンチテーゼとして「間柄」が、それぞれ位置づけられているようである。

この時代の日本における哲学・思想は、多かれ少なかれ、それまでほとんど手放して受容してきた西洋の超克をテーマとしている。和辻の哲学もそこから出発しており、西洋個人主義の超克という意識の基づいている。「風土」「間柄」のどちらからも、その超克の意図を汲み取ることはできる。しかし、双方の関係性については、論理的にいまひとつはつきりしないような印象を拭いきれないように思われる。

### 第三節 日本における「間柄」

第二章第三節において、和辻が風土を類型化し、それによつて直観的、かつ具体的に人間の存在の仕方を考察したことを紹介したが、彼は「間柄」、特に「家族としての人間」についても同様に、風土的に三つに類型化している。まず、牧場における家族について、彼は「ポリスの形成以後においては、家の意義はポリスに対してはるかに軽くなっている」(Ⅷ・一四一ページ)と述べている。それに対し沙漠地域の家族は「祖先以来の血統を背負った伝統的な存在」(Ⅷ・一四一ページ)とされるが、その家族よりも優

位に立つのが「部族」である。「部族」の厳しい団結の前においては、家族はその意義を弱めざるを得ない。和辻によると、「家族」に最も重きを置いたのは、モンスーン地域である。モンスーン地域においては「家」の全体性は歴史的に把握されている。またその家族の全体性は「個々の成員よりも先」(Ⅷ・一四二ページ)とされているのである。その中で、和辻は日本の「家」について二つの方向から光を当て、考察している。すなわち、「家」の間柄的側面と、構造的側面であるが、これについて順を追って考えてみたい。

日本においては家族制度は昔から「淳風美俗」とされており、「家」は日本の人間の存在の仕方として特に目立つものと捉えられている。その特殊性について、和辻は、古事記や万葉歌人の歌、鎌倉武士の生き方、足利時代・徳川時代の文芸等々の例を挙げつつ分析し、次のようにまとめている。

「かくして『家』としての日本の人間の存在の仕方は、しめやかな激情・戦闘的な恬淡といふごとく日本的な「間柄」を家族的に実現しているにほかならぬ。そうしてまたこの間柄の特殊性がまさに『家』なるものを顕著に発達せしめる根拠ともなっているのである。」

(Ⅷ・一四三ページ)

次に、和辻のもう一つの視点、すなわち「家」の構造的側面について和辻はどう捉えているのだろうか。間柄的「家」と同様のことが建築物としての「家」の構造についてもいえるという。和辻の言葉を借りると、「人間の間柄としての家の構造はそのまま家屋としての家の構造に反映している」(Ⅷ・一四五ページ)のである。日本では、家の内部において、個々の部屋の間にはほとんど距てがない。一方で、家の外に対してははっきりと距ての意志が表わされている。一方ヨーロッパの家は一言で言うところ「個々相距てる構造」(Ⅷ・一四五ページ)である。家の内部は個々独立の部屋に区切られ、その間は厚い壁と錠前付きの頑丈な扉とによって距てられている。部屋から一歩足を踏み出すと、そこはもう「そこ」であり、日本において玄関から家の「外」にでると同じことなのである。いったん部屋から出ると、家の廊下から町の城壁や濠に至るまですべて共同生活の場である。つまり、「日本の『家』にあたるものが戸締まりをする個人の部屋にまで縮小せられる」(Ⅷ・一四六ページ)とともに、反対に「日本の団欒にあたるものが町全体に広がって行く」(Ⅷ・一四六ページ)のである。そこでは、個人の部屋と城壁の間に位置する「家」はあまり大きな意味を持たない。ヨーロッパにおいては、「家」は重視されず、「距てある個人」と、その共同生活

に重きが置かれているのである。

間柄的な面と構造的な面から、それぞれ「家」としての日本の人間の存在の仕方の特異性を見てきた。間柄の特異性と家の構造の特異性は、どちらも日本の人間の存在の仕方につながるものであるという共通点を持っている。この両者の関係性を、さらに深く掘り下げていったとき、第二節で考えた問題に再度あたることになる。すなわち、風土と間柄とはいったいどういう関係にあるのかという問題である。ここで「間柄」は文字通り家の間柄的側面、そしてその構造的側面を「風土」として考えたい。「しめやかな激情・戦闘的な恬淡」と表される間柄的「家」、人間関係としての「家」と、内側には距てがなくて外に対しては露骨に距てを表わしている「家」の作り、構造との間には、いったいどういう関係があるのだろうか。両者の関係として、次の三つのパターンが考えられる。

### ① 風土が間柄を規定する

距てなき内部構造と外に対する厳しい距てという家の構造があり、そこに住む人間の間柄的あり方がその構造に応じた「しめやかな激情・戦闘的な恬淡」と表されるようなものになった。

### ② 間柄が風土を規定する

間柄的「家」に表われているように、その存在の仕方に特殊性を持つ人間が造った家には、その性格や特殊

性といったものがそのまま反映され、その結果内には距てがなく外に対しては拒絶の意志を表すという構造になった。

### ③ 風土と間柄はそれぞれ別個のもの

両者の間に何ら因果関係はなく、それぞれ別個のものとして必然性を持って存在する。その二つが、またまた出会った。

この中でまず消去できそうなのは、③である。和辻は『風土』の最初で（人間を取り囲む環境を）『自然』として問題とせず『風土』として考察しようとする（Ⅷ・七ページ）と述べている。そしてその「風土」を、人間の自己了解の方法、人間の存在の仕方と規定しており、そこから考えると和辻は「風土」と「間柄」とを、それぞれ別個のものとしてではなく一つのものとして捉えているようである。一つのものとして、そしてその別々の側面として捉えた上で、双方の関係についてさらに考えてみると、まず、①の考え方、すなわち風土が間柄を規定する、風土によって間柄が形作られ、またそこに特殊性がもたらされるとする考え方は一般的に妥当であると思われる。しかしながら②の考えも捨てられない。むしろ、②の方が可能性として高いのではないだろうか。その根拠は、和辻自身の記述に現れている。彼は、「人間の間柄としての家の構造はそのまま家屋としての家の構造に反映しているのである」（Ⅷ・一

四五ページ）と述べ、それについて次のように言及している。

「まず第一に『家』はその内部において『隔てなき結合』を表現する。どの部屋も隔ての意志の表現としての錠前や締まりによって他から区別せられることがない。すなわち個々の部屋の区別は消滅している。たとい襖や障子で仕切られているとしても、それはただ相互の信頼において仕切られるのみであって、それをあけることを拒む意志は現わされておらぬ。だから距てなき結合そのものが襖障子による仕切りを可能にするのである。

（中略）

第二に『家』はそれに対して明白に区別せられる。部屋には締まりをつけないにしても外に対しては必ず戸締りをつける。のみならずその外にはさらに垣根があり塀があり、はなはだしいときには逆茂木や濠がある。そこから帰れば玄関において下駄や靴をぬぎ、それによって外と内とを截然区別する。外に対する距てが露骨に現れているのである。」（Ⅷ・一四五ページ）

これを見ると、やはり②が正解のように思えてくる。しかし、そこからさらに一步踏み込んだ記述、すなわちなぜ間柄が風土に反映しているのかといったことに関しては、触

れていない。それでは②とする決め手としても、また①でないとする理由としても、少々弱いのではないだろうか。

そこで、間柄が風土を規定するという点について、もう少し考えてみたい。間柄が風土を規定するというのは、先に述べたように、間柄的「家」が構造的「家」に反映される、つまり風土が間柄をうつし出しているということである。それは、一方では間柄が建物としての家の構造を物理的に決定するという関係であると理解することができる。しかし、角度を変えて考えると、間柄と風土とは、「自己了解」というキーワードによって結びれていると理解することもできる。前述のように、和辻は風土を人間の自己了解の様式ととらえている。これを間柄に即して考えてみると、「われわれ」すなわち間柄としての人間が、自己自身をそのようなもの、つまり間柄における人間として了解する、そのしかたが風土なのである。つまり、人間が「家」において自己自身を特殊な間柄——例えば西洋の個人主義的な、あるいは日本の「しめやかな激情」という言葉で表わされているような——にあるものとして認識し、了解し、それが間柄的風土なのであり、それがそのまま外面的に、すなわち構造的「家」に投影されていると考えることができる。

総じて考えてみると、どうなるか。和辻の考えとしては、

②が中心であろうと思われるが、先にも述べたように、それだけではない。②だけをみても、違う角度からの把握が可能であったように、それは決して一面的なものではないのである。①と②とは一見全く正反対のようであるが、その相対する考えが、実はその根底において、「自己了解」という部分ではつながっているのではないだろうか。

そこで、ここでは新たに①②の考え方を結論としたい。人間の共同態においてもと一体のものである風土と間柄とが、「自己了解」というキータームのもと、互いに規定し、また影響しあい、その歴史的な積み重ねが両者の関係をより明確に形作ってきたのである。

### 第三章 評 価

『風土——人間学的考察——』は和辻の代表作と見なされており、それだけに様々な批評、批判、いわゆる毀譽褒貶の対象になることが最も多かった作品のうちのひとつである。興味深いものとして、井上光貞氏、坂部恵氏、そして湯浅泰雄氏らの評価があるが、紙面の都合上、ここでは省略させていただきます。

### 終 章

これまで、『風土』を中心に、和辻の捉えた「間柄」に

ついて考察をしてきた。和辻は、人間を単なる「人」としてではなく、「社会」における人と捉えたうえで、その「社会的な面、すなわち「間柄」を風土との密接な関係において考察している。第二章で考察したように、和辻は「間柄」と「風土」との関係性を、両者が「自己了解」という共通のキーワードを持ち、互いに規定・影響しあう関係と捉えていると考えることができるだろう。しかし、それは一般的議論であり、具体的・特殊的な面についての和辻の理解のしかたは直観によるものである。彼自身、直観を重視するというような記述を『風土』文中でしているが、その「直観による理解」に対する指摘・批判も少なくない。ところで、和辻はなぜ「間柄」にこだわりのもったのだろうか。「間柄」の思想に至る過程は、いかなるものであったのか。和辻の研究者である湯浅泰雄氏の記述に、興味深い箇所を見つけた。

「和辻の思想形成の基盤について考える場合、まず取り上げなくてはならないのは、彼がこのような地方出身だったということである。そこには、毎日の日常生活における人と人との心のふれ合いを基本にし、祖先以来受けついで伝統的習俗を守ってゆく生き方が見出される。後年の「人間の学」としての倫理学の発想は、そういう日本の「村」の生活様式に根ざしているもの

であろう。」(湯浅『和辻哲郎』一六ページ)

和辻は現在の姫路市にあたる兵庫県の仁豊野という小さな村で生まれ育った。その村及び彼の生い立ちについては『自叙伝の試み』(一九五七から『中央公論』に連載)に詳しく述べられているが、「村」という共同態において少年時代を過ごしたことが、和辻の思想形成に影響を色濃く与えているのは事実であろう。「村」において密接な「間柄」の中で生きてきた和辻は、西洋の個人主義的個人観を目の当たりにし、それに対する批判心も手伝ってか、いっそ「間柄」の思想を強めたようである。それが如実に現われているのが『倫理学』序論である。

「倫理学を『人間』の学として規定しようとする試みの第一の意義は、倫理を単に個人意識の問題とする近世の誤謬から脱却することである。この誤謬は近世の個人主義的個人観に基づいている。(中略)倫理問題の場所は孤立的個人の意識にはなくしてまさに人と人との間柄にある。だから倫理学は人間の学なのである。人と人との間柄の問題としてでなくては行為の善悪も義務も責任も徳も真に解くことができない。」(X・

一一ページ)

和辻がその生涯を通じて主張し続けた「間柄」の思想、それを、今現代に生きる私たちはどう受け止めるべきか。

現代は、和辻の時代における個人主義とはまた違った意味合いを持つ個人主義——あるいは自己中心主義という言葉で表現してもいいかもしれない——が蔓延する時代である。そんな時代にあつて、和辻のいう「間柄」、そしてその「間柄」における「自己了解」の実現を考えてみることは、決して無意味なことではなく、むしろ大きな意義を有するのではないだろうか。

## 文 献

和辻哲郎「風土」『和辻哲郎全集』第八卷(岩波書店、一

九六二年六月)

和辻哲郎「倫理学」『和辻哲郎全集』第十卷(岩波書店、

一九六二年八月)

和辻哲郎『風土』(岩波文庫、一九七九年五月)

戸坂 潤「和辻博士・風土・日本」『戸坂潤全集』第五卷

(勁草書房、一九六七年二月)

坂部 恵「和辻哲郎」二〇世紀思想家文庫一七(岩波書店、

一九八六年三月)

湯浅泰雄「和辻哲郎——近代日本哲学の運命」(筑摩書房、

一九九五年五月)